OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アンドレ・マルロー　閉じられた世界から惑星的文明へ
Author(s)	井上, 俊博
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 93-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61965
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アンドレ・マルロー　閉じられた世界から惑星的文明へ

井上　俊博

序

アンドレ・マルロー（1901-1976）はその著書『沈黙の声』に代表される芸術論の中で様々な地域・時代における芸術について論じ、また、その芸術を生む母体となった文明について言及している。その一方で彼は1960年東京日仏会館開館式における演説において、現代が過去とは異なり、「文明の複数性 la pluralité des civilisations」を発見した時代であり、それと同時に「史上初の惑星的文明 la première civilisation planétaire」が誕生しつつある時代であると述べている。そしてその舞台としての「地球と呼ばれるなにものか quelque chose qui s'appelle la Terre」の誕生を目の当たりにしており、この共通の舞台の上で人類はここに初めて「共通の冒険 une aventure commune」に乗り出そうとしていると述べている[1)]。文明の複数性についてマルローは1946年ソルボンヌで行われた講演においても言及しており[2)]、彼にとって文明のあり方、そして来るべき新たな文明のあり方という問題は重要な位置を占めていたものと思われる。

本論文では、マルローの文明観および「史上初の惑星的文明 la première civilisation planétaire」という考えに至る作家の思想的軌跡を彼の小説・芸術論などから読み取り明らかにすることを目的とする。

1.　複数の文明：個別的価値体系

マルローは文明を複数としてとらえ、これらを語る。しかし、古代エジプトやローマ、メソポタミアなど、様々な文明が我々人類の歴史の中で勃興を繰り返してきたことは誰の目にも明らかであり、人類が一つの文明を共有し、その中で生きてきたわけではないということも誰もが理解している。問題は、何をもって個々の文明が他の文明とは異なり、個別的なものであると考えるかである。個々の文明の特徴という点では、産業・交通に関するインフラ・宗教など、様々な見方が

1）«Au même moment, nous découvrons, avec la pluralité des civilisations, la naissance de la première civilisation planétaire. Quels que soient nos désirs, nous savons que maintenant l'humanité a pris conscience d'elle-même et que pour la première fois, elle va tenter une aventure commune. Malgré la politique, malgré les haines, malgré peut-être les amours, quelque chose qui s'appelle la Terre est en train de naître et les hommes sont en train de se rapprocher par des voies bien différentes les unes des autres :» 堀田郷弘「東京日仏学院開会式におけるマルロー氏の演説（1960年2月22日）と東京羽田空港におけるインタヴュー（2月29日）」『城西人文研究』第5号、1978年、p.135.（なお本文献における日本語訳に関しては文献中にある堀田訳を参照し筆者が手を加えたものである。また、本論文中における引用部の日本語訳、下線は筆者によるものである。）

2）André Malraux, *Œuvres complètes IV* , Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2004, p.1203.

あるだろう。その中でマルローは、個々の文明の個別性を決定するものは、個々の文明それぞれが個別に構築したその価値体系であると述べている[3]。また文明の構成員はその価値観の中で生きている。このような価値体系に内包された世界観をマルローは「閉じられた世界 mondes clos」[4]と呼んでいる。マルローにとって文明は、地理的要因やそれが存在した年代によって隔たっているのではなく、この価値体系によって洋上の孤島のように互いに隔たっているのである。このような個別的文明の価値体系を彼は芸術作品の中に見ている[5]。一例として彼は『沈黙の声』の中で現実に存在するものしか信じず、写実性を追求した古代ローマ[6]と、死者の魂の永世を信じ遺体をミイラにして保存した古代エジプトとの間には、その作品制作の前提となる価値基準において大きな隔たりが存在していたと指摘している。そしてそれぞれの文明は、各々が信じる真実に即した形で芸術を創造したと、彼は考えているのである。

> 古代エジプトの芸術はローマの彫像のようにそこにあったものをそのままの姿で定着させようとしたものではない。ビザンツ芸術が生きている皇帝を聖なるものへと到達させようとしたように、それは死者を永遠へと至らせようとしたのだ。古代エジプトの芸術は世界の法であるマアートに従い、地上のフォルムをとらえがたき地下の世界に調和させるフォルムを創造したのである。すなわち、[古代エジプトの人々が信じた] 真実に即した姿を作り上げたのである[7]。

芸術作品に見られる技巧などもさることながら、マルローは作品の制作に際し制作者が基準とした価値を重視している。そして消滅していった過去の文明が生み出した芸術作品はただ過去の遺物というだけでなく、文明が保持していた固有の価値を表現するものであり、この価値は現代を生きる人間の中にも伝達されたとマルローは考えている。

> 消え去った諸文化をただ諸形態として考えないように注意しよう。すなわ

3）«c'est-à-dire l'idée que chaque civilisation particulière avait créé son système de valeurs, que ces systèmes de valeurs n'étaient pas les mêmes, qu'ils ne se continuaient pas nécessairement, et qu'il y avait entre la culture égyptienne, par exemple, et la nôtre, une séparation décisive, qui coupait ce que les Égyptiens avaient pensé d'essentiel de ce que nous pensons aujourd'hui.
Cette idée de cultures, considérées comme mondes clos, a été acceptée dans la majorité de l'Europe entre les deux guerres.» *Ibid.*, p.1203.

4）cf. 注 3.

5）中田光雄『諸文明の対話』みすず書房、1986 年、pp.80-83.
マルローにとって芸術は人間活動の一つである以上に、それらの総体である文化・文明の最良の側面であり、文化・文明とほぼ同義であると中田光雄は指摘している。

6）«Rome n'accepte, ne reconnaît, que ce qui est. [...] Et si l'écart entre le portrait romain et ceux qui vont le suivre est si grand, c'est que Rome n'a de prolongement dans aucune domaine : [...] ses portraits sont des photographies parées. Même quand elle [=Rome] leur donne vie, elle ne leur donne pas d'âme, car elle n'en a pas.»
André Malraux, *Œuvres complètes IV*, *op.cit.*, pp.398-399.

7）André Malraux, *Œuvres complètes V*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2004, p.14.

ち、[我々がそれらについて知っていることというのは] 推測でしかないのだ。我々は古代エジプトの人々の精神というものが実際のところ如何なるものであったか何一つ知らないということはあり得るのである。その一方で、我々は以下のようなことを知っている。それらの文化を通じていくつかの伝達可能な諸価値が閉じられたものとして我々に与えられ、伝わってきたということを。そしてその諸価値こそが我々の思想の中に到達したのであるということを。そしてこの諸価値から我々は全体として一つのものを作り上げようとしているのだと。私はその極端ではあるが明確な例として、芸術作品を挙げる[8)]。

では、マルローが指摘し現代にまで伝達されてきたと主張するこの価値とは、如何なるものであろうか。

私が最もあなた方に注目していただきたい重要な点とは、本当の問題点は文化の如何なる特性が伝達されてきたかという点ではなく、個々の文化が持っていた人間主義の性質が如何にして我々にまで到達し、そしてそれらが我々のものになったかを知ることなのです[9)]。

つまり、個々の文明が「閉じられた世界」の中でそれぞれ作り上げた価値とは、人間はその肉体的死とともに消滅するものではなく、魂が死後も永生を続けるという古代エジプトの観念や、人間とは今ここに存在し、そして死後の世界など無く肉眼でとらえられる現実的生を重視する古代ローマの観念といった、個々の文明における「自分たち人間とは如何なる存在であるか」という個別の観念なのである。よって、ヨーロッパに対しても、過去の文明における個々の人間存在に対する観念の重層性という点にマルローの視線は注がれている。彼は、現代ヨーロッパ文明は古代ギリシア・ローマ・キリスト教といったそれぞれ異なる文明から受け継がれた諸要素から成り立つものであると考えており[10)]、また同時に、これらの諸文明はそれぞれ独自の人間に対する観念を保持していたと指摘している。1926年に出版された『西欧の誘惑』の中でマルローは中国人青年リンに西欧における古代ギリシアとキリスト教、それぞれの人間に対する観念を語らせている。その観念とは、ギリシアは人間を「生まれ、そして死んでいく一個人」として、そして人間と世界を区別されたものとして考えていたが、対してキリスト教は人間を

8）André Malraux, *Œuvres complètes IV*, *op.cit.*, p.1203.
ここでマルローは「文明 des civilisations」ではなく「文化 les cultures」という言葉を使っているが、中田光雄によればマルローにとって文化と文明はそれぞれ「（ⅰ）「文明」は「文化」を含むより大きな単位（ⅱ）「文化」は「文明」における精神性の強い側面、「文明」は精神的な活動を含むすべての人間的な営みの総体」を意味すると指摘している。ただし、このような区別は常に適用されているわけではなく、マルローの思想全体において文明・文化はほぼ同値のものであると指摘している。中田光雄 *op.cit.*, pp.80-81.

9）André Malraux, *Œuvres complètes IV*, *op.cit.*, p.1204.

10）André Malraux, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1989, p.273.

万物の創造主である神と被創造物として結びついたものとしてとらえていたというものである[11]。また、このような観念はその裏にそれぞれの苦悩を抱えており、ギリシアにおいては人間を世界と区別することで人間存在を肯定する力を得た一方で「人生に意義を与えようとした純粋な不安」が存在し、キリスト教においては創造主である神を讃えることを通じて被創造物である人間を肯定し、両者は固く結びついていたが、人間の内面に生じる苦悩とこれを解決する為の闘争はそのまま神へと収斂されていく。自らに対する問いはそのまま神への問いとなり、ギリシアのような自己解決の手段を失った人間は目には見えぬ神からの答えを求め「盲人のように gestes d'aveugles」彷徨う[12]。ここで注目したいのが、これら人間存在に対する観念はその内包する苦悩が個別的であるように、混ざり合い一つの流れとなって現代にまで到達したのではなく、地層のようにその特徴を保持したまま現代に至るとマルローが考えている点である。

> かつては、ヘブライ文明やギリシア文明、ローマ文明はキリスト教文明に到達するために存在していたと、中華文明、そしておそらく遊牧民の文明は日本文明に到達するために存在したのだと信じられていました。今や我々は知っています。お互いについて全く無知なまま、それぞれが独自の真実を互いに知ることなく探求した文明が数知れず存在したのだということを。そして現代を生きる我々はそれらすべての文明に対する知識とは言わないまでも、少なくともその痕跡を所有する初めての人間たちなのだということを[13]。

産業や科学、学術的知識の蓄積と伝播という意味では、キリスト教文明はギリシアやローマ文明から多くのものを受け継ぎ多大なる影響を受け、また時として相克があったため、「お互いについて全く無知であった」というマルローの指摘は当てはまらない。ここでマルローが指摘している「互いの文明に対する無知」とは、それぞれの文明が保持している人間存在に対する観念について、お互いに理解し合っていなかったという意味である。その例として、マルローは『沈黙の声』の中で古代ローマの芸術における形態が他の文明へと伝播し新たな形態を生むに

11）« Une seule vie. Pour moi, Asiatique, tout le génie grec est dans cette idée et dans la sensibilité qui en dépend. Il y a là un acte de foi. Le Grec croit l'homme distinct du monde comme le chrétien croit l'homme lié à Dieu, comme nous croyons l'homme lié au monde. [...] Les Grecs ont conçu l'homme comme *un* homme, un être qui naît et meurt. » *Ibid.*, p.73.

12）«J'y entendais deux voix chrétiennes : l'une chantait la gloire de Dieu ; l'autre l'interrogeait sourdement. Et celle-ci ne cherchait plus à donner à l'homme conscience de celle de ses forces — de la puissance à la volupté — qui l'affirment en le séparant du monde ; à ses hésitations, à ses regrets, au combat intérieur qui constitue sa vie, elle donnait l'importance et l'intensité suprêmes : elle leur attachait Dieu. [...] Dieu et lui [=Le chrétien] sont désormais attachés l'un à l'autre, et le monde n'est plus rien que le vain décor de leur conflit. Au tourment intellectuel des Grecs, à l'inquiétude pure qu'ils trouvèrent en tentant de donner à la vie un sens humain, se joignent votre angoisse et vos gestes d'aveugles, Dieu se révèle à vous par des émotions violentes et c'est en ordonnant ces émotions que vous tendez vers lui. » *Ibid.*, p.74.

13）堀田郷弘、*op.cit.*, p.134.

至ったことを認めている一方で[14]、ローマの支配下にあり、また芸術の技巧において写実的描写法を受け継いだエジプトのファイユームの芸術は死に対する感情、そして人間の魂の在り方という点においてローマとの間に隔絶があったと指摘している[15]。確かに歴史的事実の系譜から見れば、古代エジプトではマケドニアやローマなど支配者の推移に伴い、キリスト教など様々な文明・宗教が流入し広まったが、時代の流れと共にこれら諸文明の個別的人間存在に対する観念が受け継がれ、一つの流れとなって発展を続けたとは、マルローは考えていないのである[16]。

> ［...］かつて個々の文明は、他の文明を原始的なものとして、あるいは敵としてしか知らなかったのです。キリスト教にとっては、古代ギリシアはルネッサンス期に至るまでの歴史的一段階にしかすぎなかったのであり、イスラム教はインドや日本がそうであったように、単に敵でしかなかったのです[17]。

2. 文明の多数性発見の場としての美術館・博物館

では、閉じられた世界の中で個別的に存在し、それぞれの間に断絶を抱えながら積み重なってきた諸文明の価値が現代に「到達し、そしてそれらが我々のものになった」[18]というマルローの主張はどのように理解すべきであろうか。過去の諸文明の価値が堆積し、その最上部に現代が存在するという意味においては、これらの価値がそのまま我々のものになるという主張はマルローの文明観とも矛盾している。よって、この発言には時系列の結末として我々のものになることとは異なる意味が含まれていると思われる。ここでもう一度、それぞれの文明固有の観念を表現したものとして芸術作品をマルローが見ていたこと、そして芸術作品が現代に至るまでに経験した諸段階に関する彼の言及部に注目したい。潰えた過去の文明の遺物であるこれら芸術作品はそれを生んだ文明の消滅と共に制作当初の意味を失い、それを発見した者によって時には「好奇心の対象として」、次いで「歴史・科学の調査対象として」といったように、作品と鑑賞者の間に生じる作品

14）« Un art parent semblait d'ailleurs s'élaborer hors de Rome : à Palmyre et au Fayoum, la forme romaine avait rencontré l'Orient comme la forme grecque avait au bas du Pamir rencontré l'Asie. » André Malraux, *Œuvres complètes IV*, *op.cit.*, p.388.

15）« Plusieurs styles avaient été liés au sentiment de la mort, mais devenu conscience. Au Fayoum, il [=le sentiment de la mort] cherche sa forme, que Rome a retirée à l'Égypte. Pour métamorphoser les portraits latins, cet art découvre qu'ils sont amputés de l'autre monde. Qu'attend-il de ses propres figures, peintes parfois sur le suaire ? Le visage éternel du mort. L'Égypte pharaonique en avait assuré l'éternité par son style, qui traduisait toutes les formes en langage sacré ; un tel style était né d'une religion capable d'informer la vie tout entière. » *Ibid.*, p.402.

16）ある文明の価値観を歴史的時系列の中の一段階とみなし、段階的に発展してきたのではないとするこのようなマルローの見方は、芸術史に対するマルローの立場にも関連している。芸術作品は、歴史的時系列、作品の前後関係においてのみ意味を持つのではなく、むしろ前後の作品との間には断絶が存在し、その固有性によって理解されねばならないとマルローは考えていたと中田は指摘している。中田光雄、*op.cit.*, pp.3-5.

17）堀田郷弘、*op.cit.*, p.135.

18）cf. 注 9.

の存在意義の変化を経験してきたとマルローは指摘している[19]。そしてこれら再発見された遺物である諸芸術作品が集う場である美術館・博物館が登場し、ここにおいて初めてそれらは絵画や彫刻といった「芸術作品」となったとマルローは考えている[20]。美術館・博物館に収容された芸術作品は、崇拝の対象という宗教的役割が制作当初の目的であったとしても、もはや崇拝の対象ではなくなってしまう。また、作品の過去の文明における宗教的役割や、その作品が表現する神が如何なるものであるかといったことを、考古学的研究を通じ解き明かしたとしても、信仰者無き神像が本来の役割を果たすことはもはやないのである[21]。制作当初の目的とは異なるものとして芸術作品は鑑賞者の鑑賞の対象となり、「役目から解放される délivrer de leur fonction」[22]のである。このような作品が集う場である美術館・博物館をマルローは『王道』の中の登場人物クロードに「美術館は私にとって過去の作品たちが神話となって、歴史的な生命を生き、眠っている場」[23]なのだと語らせている。歴史・科学の研究対象としての役目を美術館・博物館において果たすという意味において、芸術作品は「歴史的生命を生きている」と言えるだろう。注目すべきは、それらが「神話となって眠っている」という点である。ある文明における世界の創造・人間の起源といった固有の価値観を説明する神話を内包したものという現代的意味を、マルローは収蔵品である芸術作品に付与するのである[24]。この文明固有の価値を表現したものという視点で作品を見る時、かつての意

19）«Pendant au moins mille ans, dans le monde entier, l'art de Ramsès ne fut pas moins oublié que son nom. Puis il a reparu comme curiosité, de même que les arts dits chaldéens, et tout ce qui entourait la Bible. Puis la curiosité est devenue objet de science ou d'histoire.»
André Malraux,*Œuvres complètes Ⅲ*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1996, p.51.

20）« Un crucifix roman n'était pas d'abord une sculpture, la *Madone* de Cimabue n'était pas d'abord un tableau, même la *Pallas Athéné* de Phidias n'était pas d'abord une statue.
Le rôle des musées dans notre relation avec les œuvres d'art est si grand, que nous avons peine à penser qu'il n'en existe pas, qu'il n'en exista jamais, là où la civilisation de l'Europe moderne est ou fut inconnue ; et qu'il en existe chez nous depuis moins de deux siècles. Le XIX^{e} siècle a vécu d'eux ; nous vivons encore, et oublions qu'ils ont imposé au spectateur une relation toute nouvelle avec l'œuvre d'art. Ils ont contribué à délivrer de leur fonction les œuvres d'art qu'ils réunissaient ;» André Malraux*, Œuvres complètes Ⅳ*, *op.cit.*, p.203.

21）«Les dieux ne meurent pas parce qu'ils perdent leur pouvoir de royauté, mais leur appartenance au domaine à jamais inconnaissable qu'ils suggéraient. Qu'ils fussent nés de l'autre monde égyptien, ou qu'il fût né d'eux, ils n'étaient plus, tirés de lui, que des poissons hors de l'eau, des personnages de contes, des figures. Qu'importaient nos interprétations successives d'Horus et d'Osiris ? Les dieux n'ont pas de sens, si l'Olympe n'en a plus ; Anubis l'embaumeur n'a pas de sens, si le monde des morts n'en a plus. Chacun des dieux avait appartenu à l'insaisissable monde de Vérité qu'avaient adoré les hommes. L' Égypte avait rappelé Osiris à la vie par ses prières, et nous l'y rappelions par sa forme et par la légende — par tout, sauf par la prière.» André Malraux,*Œuvres complètes Ⅲ*, *op.cit.*, p.58.

22）cf. 注 20.

23）« —Les musées sont pour moi des lieux où les œuvres du passé, devenues mythes, dorment — vivent d'une vie historique —,» André Malraux,*Œuvres complètes Ⅰ*, *op.cit.*, p.398.

24）よって、古代エジプト文明固有の価値観は、歴史的変遷の結末としての現代エジプトにおけるイスラム教の中にその痕跡を探し求めることによって見出されるのではない。マルローにとってそれはあくまでも美術館・博物館という場において初めて見出されるものである。
«Ce n'est pas à travers le Coran que l'Islam égyptien ressuscite l'Égypte, c'est à travers le Louvre, le British Museum, et le musée du Caire.» André Malraux*, Œuvres complètes Ⅲ*, *op.cit.*, p.51.

味を失い眠っていた潰えた文明の遺物である作品は、現代的意味を得て再び蘇るのである。このような作品と鑑賞者との関係は、歴史・考古学的研究という段階を経て現代において初めて実現したものであると言える。よって、かつての文明における人間存在に対する固有の観念が現代へと到達し、それらを自分のものとして所有するに至ったのは歴史的変遷の結果ではなく、この美術館・博物館という場において、その固有性を保持し作品の中に閉じ込められた状態で現代に新たな意味を持って挿入されることによってなのである。そしてこのような芸術作品の見方が芸術作品、そして過去のものであれ現代のものであれそれが表現する個々の文明の価値を歴史の時系列から解き放ち、現代において同じ水平線上に並列する文明の多数性という考えを生じさせるのである。

ただし、美術館・博物館の前提である研究機関の研究目的が当初からこのようなマルローの文明の多数性という考えに合致したものであったというわけではない。藤原貞郎によれば、19 世紀後半におけるフランスの美術館・博物館に異文明に属す植民地などの芸術作品を収蔵し研究する目的は、純粋に美術・考古学研究という目的ではなく「実践的植民地学として」であり、極めて政治性の高いものであった[25]。このようなフランスの植民地における研究姿勢は、フランスの植民地、即ちクメールなどといった異文明に対する支配者・所有者としての優越感に基づくものであり、歴史・考古学研究を通じての植民地の歴史の再構築と注入は植民地における過去の文明や文化を支配者であるフランスへと収斂させ、その支配を強化するためのものであったと言える。このような異文明に対する姿勢は、マルローの個々の文明の固有性に注目し、「根本的に、どのような文明でも、他の文明に対しては不可知なのです。作品は存続し、それらを前にして我々は、我々の神話がそれらの神話と調和し合うまで盲目でいるのです。」[26]と『王道』の中で極東学院院長ラメージュに語らせたクロードの言葉とも相容れない。支配者であるフランスの持つ神話＝価値観が他の文明の価値観との関係の中で支配者ではなくその一つであると認めるまで、芸術作品が内包している個々の文明の価値に対して目を向けることはできないとマルローは考えていたのである[27]。マルローの文明の多

25）藤原貞郎によると、19 世紀後半フランスはインドシナ諸国を支配地域としながらも、クメール碑文研究はオランダに、シャム語文法研究はドイツによって先行されるという状況にあり、このような遅れを取り戻し植民地支配やアジア諸国への介入を象徴レベルで支えるために、フランス極東学院を創設した。東洋学者たちは研究対象であるアジアの 19 世紀は堕落の世紀であると考え、アジアの過去を歴史的に再構築し、この再構築された歴史を植民地に注入することで知識を授ける必要があると考え、政治・文化的介入を正当化した。また、このような目的の下設立された極東学院は植民地における芸術作品・文明の遺物に関する移動の制限・売却など法的整備に対し私物化とも言える権限を持っていた。　藤原貞郎『オリエンタリストの憂鬱』めこん、2008 年、pp.122-135, 255-258.

26）«En profondeur, toute civilisation est impénétrable pour une autre. Mais les objets restent, et nous sommes aveugles devant eux jusqu'à ce que nos mythes s'accordent à eux... »
André Malraux,*Œuvres complètes I , op.cit.*, p.398.

27）マルローは自身の政治的立場は若き日のインドシナでの経験より始まると述べており、インドシナで彼はフランスの植民地支配における拷問や不正などに反対し、インドシナ諸国の独立を訴えるまでには至らないまでも現地人の権利を主張する ***L'Indochine***、***L'Indochine enchaînée*** といった新聞を 1925 年から発行していた。このような政治的立場も支配者としてのフランスではなく、数ある文明の中の一つとしてのフランスという考えに至る過程におい

数性という考えは、支配者としてのフランスから数ある文明の中の一つとしてのフランスという状態を前提としたものであると言える。

3. 地球と惑星的時間

このようにマルローの文明の多数性という考えは、支配者としてのフランスという帝国主義・植民地主義的スタンスから脱却し、それぞれが独自性を保持し並存する場である美術館・博物館という存在を前提としている。しかしヨーロッパ帝国主義は、その過程においてもう一つの可能性も内包していた。ヨーロッパは大航海時代に入りアジア・アフリカなどへと侵出を始めるが、16 世紀、この侵出と航海の過程において、彼らは「限りなく拡大する平面」と思われていたこの世界が「球体」であることを発見する。この発見は本来幾何学用語としての sphere（球体）を意味するものであった globe という単語に対し、「地球」という新たな指示対象を与えることとなった[28]。つまり、球体としての惑星・地球という世界の在り方を見出させたのである。また、この惑星という考え方は、我々が地上から眺める星々と同様に、地球もまた諸惑星の一つであるという相対化をもたらす。マルローにおいてこの地球、惑星、そして空は時間の観念と結びついている。『王道』では太陽と夜空の下密林の中を行動するクロードらが描かれている[29]。地球が太陽を中心に回っていることを示すように、太陽の角度に従って地上にあるクロードらの影は日時計のようにその形を変えていく。この惑星の運動から生じる時間は、風化という時間の経過がもたらす変化に結びついて描かれており[30]、またこの惑星的時の流れの中で登場人物ペルケンは死んでいく。死にいくペルケンを見つめながら、クロードは以下の思いに駆られるのである。

> 《今この時間に、いったいどれくらいの人間が彼のような死に行く肉体を見守っているだろう？》ヨーロッパの夜に、またアジアの日の中で死んでいく

て無視することはできない。このような植民地支配に対するマルローの反感と行動については、以下の論文が言及している。
Raoul Marc Jennar, «*André Malraux et le Cambodge : du procès de Phnom Penh au combat anticolonialiste*», Jean Lacouture, «*Malraux et la question nationale vietnamienne*», in *Présence d'André Malraux*, Numéro 8/9, 2011, pp.55-65, 98-107.

28）下河辺美知子、「21 世紀における惑星的想像力　globe の濫喩についての一考察」『成蹊大学文学部紀要』第 49 号、2014 年、pp.175-176.　なお、sphere、globe 共に参考文献中英単語が使用されているため、以下本論文中でも英単語を使用している。

29）密林に遮られ地上にある人間からは見えない状態にある時も地球は太陽を中心に回り、地球の運動から生じる時間はクロードらの存在を弄ぶ様に彼らの影の形を変化させていく。
«La nuit et le jour, la nuit et le jour ; enfin un dernier village grelottant de paludisme, perdu dans l'universelle désagrégation des choses sous le soleil invisible.»
André Malraux, *Œuvres complètes I*, *op.cit*., p.422.
«Mètre par mètre, la piste s'allongeait sous les ombres maintenant verticales ; le bruit des coups de marteau demeurait seul dans cette lumière de plus en plus jaune, ces ombres de plus en plus courtes, cette chaleur de plus en plus intense. [...] Désagrégation de la forêt, du temple, de tout...» *Ibid.*,p.429.

30）Gérard Fritz もマルローにおいて時間は摩耗や老化、破壊を意味することを指摘している。
Gérard Fritz, «*Lecture et discours de l'histoire chez Malraux*» , in *ACTES ET COLLOQUES*, 26. *Le livre dans la vie et l'œuvre d'André Malraux*, 1988, p.62.

これら全ての肉体が、人生の空しさに押しつぶされ、朝には目覚めるであろう人間たちへの憎悪で満たされながらも、神々によって慰められていた[31]。

この地球上において欧州の夜とアジアの日中は同時に起こる状況であり、ただ人間の時間に対する意識がその存在する地点において異なる。そして地球という惑星の運動から生じる時間は、人間が人為的に設定する時計などによって表示される時間とは無関係に自らの時を刻み続ける。このことを暗示するように『人間の条件』ではそれぞれ異なる時刻をさす三十以上の振り子時計が登場する。これらの時計の動きは「革命のさなかでも無感動な、これら時計の動きの世界 cet univers de mouvements d'horlogerie impassibles dans la révolution」と表現され、さらに人間たちの行動や意志と関係なく時を刻み続ける地球の動きを暗示するように、太陽と空の描写がなされている[32]。個々の時計が示す時間が地球上の各地点において異なり、その時刻に対する人間の意識がそれぞれ異なるものであったとしても、あくまでもそれは人間が人為的に定めた時刻である。時刻を進め、戻し、或いは止めることの出来る時計が指し示す時間は、言わば「分断された人間の時間」である。しかし地球という惑星上に存在する人間は、この惑星の運動により刻まれるより大きく、そして統一的時間、即ち「惑星的時間」に内包されている。革命という人間の行為や異なる時刻を指し示す多くの時計とは無関係に、陽光は地球が太陽を中心に運動を続け、惑星的時間を刻み続けていることを暗示している。また、物語の終盤、登場人物ジゾールは日の光と風の中に自らを死へと運び去っていく時間を発見するが、この時間が彼を世界と結びつけている[33]。陽光と共に描き出される彼が見出した時間とは、人間を死へと追いやり、太陽を中心に回る地球の運動の中へと人間の死すらも溶解させていく、万人に共通する惑星的時間であると言える。

人種も国籍も価値観も異なる多様な人間達は、低通するこの地球の運動から生じる惑星的時間の中で生き、そして死んでいくという一つの共通項を持っている。人間の歴史はこの惑星的時間の中での人間の出生と死の積み重ねとも言える。そして歴史も、惑星的時間の流れの中で潰えた過去の多くの文明のようにいつしか

31）André Malraux,*Œuvres complètes I*, *op.cit*., pp.505-506.

32）« Tchen regarda l'heure. Dans ce magasin d'horloger, trente pendules au moins, remontées ou arrêtées, indiquaient des heures différentes. [...] Tchen hésita à regarder au-dehors ; il ne pouvait détacher ses yeux de cet univers de mouvements d'horlogerie impassibles dans la révolution. [...]
Un rayon de soleil entra. Là-haut, la tache bleue de l'éclaircie s'agrandissait. La rue s'emplit de soleil. » *Ibid*., p.600.

33）«Le ciel rayonnait dans les trous des pins comme le soleil ; le vent qui inclinait mollement les branches glissa sur leurs corps étendus. Il sembla à Gisors que ce vent passait à travers lui comme un fleuve, comme le temps même, et, pour la première fois, l'idée que s'écoulait en lui le temps qui le rapprochait de la mort ne le sépara pas du monde mais l'y relia dans un accord serrein. [...] L'humanité était épaisse et lourde, lourde de chair, de sang, de souffrance, éternellement collée à elle-même comme tout ce qui meurt ; mais même le sang, même la chair, même la douleur, même la mort se résorbaient là-haut dans la lumière comme la musique dans la nuit silencieuse : » *Ibid*., pp.759-760.

風化していく[34]。ヨーロッパが侵出の過程で見出した惑星としての地球という考えは、マルローにおいて支配者・被支配者の区別無く万人に等しい人間の条件・惑星的時間の発見へと繋がっていくのである。そしてまた、この共通項としての惑星的時間の発見は、幾何学用語としての sphere = globe、そして植民地支配という欲望の対象としての大地から、様々な固有の価値体系をそれぞれが独自に保持しながら生きる人間という人間存在への意識をもって、文明の多数性を内包する共通の惑星「地球 la Terre」[35] というこの星の在り方の発見へと繋がるのである。

結論

人間、そして歴史ですら惑星的時間の流れの中で消えていく。しかし個々の閉じられた世界の中で人間が築き上げてきた人間存在に対する諸価値は芸術作品に内包され、時代を超え現代を生きる鑑賞者の前に共時的なものとして現代という同じ水平線上に並存する。そして諸芸術作品は年代・地域などの差異を超え、共に地球が刻み続ける惑星的時間の流れ、そして時の流れが万人にもたらす死に対して[36]、人間存在の価値を訴えるのである[37]。共通の大地である「地球 la Terre」上に並存する「複数の文明 les civilisations」における人間存在の諸価値に立脚し、惑星的時間を前にして現代的人間存在の価値を模索する行為は「人類共通の冒険 une aventure commune」であると言える。この冒険を通じ、複数形の「文明 les civilisations」ではなく「史上初の惑星的文明 la première civilisation planétaire」誕生が可能となるのである。

（大阪大学非常勤講師）

34）マルローはその人生の中でスペイン内戦や第二次世界大戦など多くの歴史的出来事に参加したが、これは時代的背景から来る必然性ではなく、歴史の一環をなす時間、そして不合理への意識から自ら進んで歴史へと向かったと Gérard Fritz は指摘している。また、彼によれば、マルローにとって「時間は歴史を溶解させ、そして歴史とはまずこの溶解を意味する Le temps dissout l'histoire et l'histoire est d'abord cette dissolution」のであり、歴史とは、人間の過去や行動の記憶ではなく、人間の時間へ服従を意味していると指摘している。Gérard Fritz, *op.cit.*, pp.61-62.

35）cf. 注 1.

36）『反回想録』の中でもマルローは死や星々の運動、歴史といった時間の流れに耐えつつも存続する芸術作品の在り方を登場人物ワルターに語らせている。
« Mais je sais que certaines œuvres résistent au vertige qui naît de la contemplation de nos morts, du ciel étoilé, de l'histoire... » André Malraux,*Œuvres complètes Ⅲ*, *op.cit.*, p.29.

37）マルローは惑星的時間や死に対して地球上の諸文明の価値に立脚し、現代における人類の価値を新たに創造しようとする行為を「全人類のルネッサンス」と呼んでいる。
« Et notre époque, qui est à bien des égards une renaissance de l'humanité tout entière, redécouvre sans doute culture de la même façon. Sachons donc que maintenant nous parlons pour parler de l'un des plus grands efforts de l'homme en face de la mort. » 堀田郷弘、*op.cit.*, p.134.